

発刊にあたって

わが国の養豚は、明治初頭にイギリスから中ヨークシャーやバークシャーが輸入され、その初期は都市近郊で残飯等を主たる飼料として飼われていました。大正時代に入って、富国強兵策や産業振興とともに農業振興策として養豚が奨励され、副業的な形で農家養豚も普及してきました。その後第二次世界大戦が始まるまでは飼養戸数も頭数も増加を続けていましたが、戦争による食料需給の逼迫から豚の飼育は減少の一途をたどりました。戦争が終わり、食料事情の好転にとともに豚の飼育も徐々に回復し、特に国民所得の向上にとともなう食肉需要の増大とともに1960年代に入って急速に発展してきました。そして申すまでもなく、今やわが国の食肉消費の中核的な地位を占めるに至っております。

その間、豚の品種の変遷や登録制度、産肉能力検定、人工授精、飼料や飼育施設機器等飼養管理技術、疾病の防除技術、養豚経営の大型化、食肉流通の近代化等、豚肉生産・流通面でも著しい変革や発展がみられてまいりました。

本書は、わが国の養豚の発展過程で豚の改良増殖や生産技術の分野において長年にわたり研究開発、教育や技術の普及面を中心にわが国養豚界の指導的立場におられる丹羽太左衛門博士が「20世紀における日本の豚改良増殖の歩み」と題し、20世紀におけるわが国の豚の改良増殖やこれらの技術の発展の歴史を体系的にとりまとめられたものであります。

当協会では、わが国の養豚関係者が豚の改良増殖を効率的に推進する上で、本書は極めて参考となる貴重な資料であることからここに印刷し、関係者の方々に配布することとした次第であります。

発刊にあたり、ご執筆いただいた丹羽博士をはじめ、資料の提供等にご協力をいただいた(社)日本種豚登録協会ほか関係機関の諸氏に対し感謝申し上げますとともに、本書が養豚関係に携わる皆様方のお役に立てば幸甚であります。

平成13年3月

(社)畜産技術協会
会長 白根 亨